

メルロ=ポンティの現象学における身体の構造と機能 について

樋渡, 河
九州大学大学院人文科学研究院哲学部門 : 助手 : 西洋近現代哲学

<https://doi.org/10.15017/3612>

出版情報 : 哲學年報. 66, pp.81-97, 2007-03-01. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン :
権利関係 :

メルロ・ポンティの現象学における身体の構造と機能について

樋 渡 河

はじめに

我われはどのように世界に住み着いているのだろうか。我われは世界の中でどのように物や道具や他者と、とりわけ我われ自身とかがわりあっているのだろうか。

身体^①こそは、我われが世界に住み、世界の中で物や道具や他者^②とかがわり、それによっておのれの実存に出会うことを可能にする。『知覚の現象学』は何よりもまず世界内存在としての現象的身体 *corps phénoménal* についての記述学であつて、世界に根づいた身体系についての豊富な記述例である。身体とは、様々な存在者と実存の織り成す絆であり、実存の運動の凝固化した現実態である。^③ 実存とは、おのれを超え出て身体によつて世界へと向かう超越の運動^④であり、おのれの投げ出された偶然的状況を引き受けながらおのれに合わせて取り入れることで必然的なるものへと向けておのれを再編成してゆく運動である。この超越の運動のもとに、私の身体は、身体それ自身と、物や道具や他者とひとつの系を作り上げ、この「生の連関」という系における心臓部を担い、あたかも血液循環によるかのごとく系全体を生気づける(235)。この系が身体を中心に全体的協働的に交換・交感作用を繰り返すことで、実存は世界に受肉する。身体は、世界へと向かう実存の方向としての態度 *attitude* のもとに、身体内部のみならず世界そのものへもその血管や神経の網の目状の糸を無数に張り巡らせて、世界をおのがものとしている。

しかしながら、身体の系はたして常に全体的で協働的な連関系なのだろうか。錯誤や疾病や狂気といった、世界や事物や他者との共存、環境への適応とは言い難い難いあり方もまた、高度にして複雑な知的生命体としての人間のあり方のひとつである。なるほど、メルロ・ポンティは、病もまた実存の態度のひとつとしての「状況からの逃走」や「共存の拒否」の身体的現われであり、病的身体であっても実存の現実態のひとつであると考えている。「病気とは、幼児期やへ原始√状態と同様に、ひとつの完全な実存形態である」(25)。病者もまた彼なりの仕方では世界を獲得し平衡化してゆく実存なのである(91)。たしかに、病人であろうが狂人であろうが、実存である限りその根本的態度は世界の引き受けと世界への乗り越えなのだが、しかし、それは「病的屈曲」(59)をも許すような極めて「ゆらぎ」のある態度であつて、その現われに他ならない生の連関にも乱れや破れが至るところで生じてはいないか。そしてその理由は、現象的・身体的・構造上の事実性や機能上の有限性による根源的偶然性という生の制約のためではないか。

小論のねらいは、『知覚の現象学』における身体の構造と機能に正常と異常という二つの観点から光を照射して、我われがそれを通じて世界に住む身体のあるり方を解明することにある。この考察によつて同時に、実存のあり方、それ自体は偶然的でしかない身体によつて、未規定的なものを規定的なものとして回収し、それによつて世界を獲得するという在り方が明らかになる。

一 統合し協働する身体

本節では、経験の成立構造を主題に採り上げる。経験を根本において成り立たせているのはこの身体である。経験は身体が身体自身や物たちと取り結ぶ親和性によつて構造化されている。ただし、この親和性は、無数の要因によつて傾向づけられており、極めて錯雑とした構造形成体である。親和性とは図式であり、もつとも簡単に定式化すれば、絡み合いである。われわれは絡み合いによつて世界に住む。

時間性と空間性と身体性 実存⁽⁶⁾が世界においておのれを実現するためには、まず世界が実存に与えられねばならない。世界の所与性というわれわれにとつての根源的受動性をもとにしてはじめて、様々な知覚・運動・言語活動といった人間の営為も可能となる。それゆえ、世界地平は潜在的・顕在的な人間の営為の背景である。しかも、世界地平は、単に感性的で単に個別的な多様としてではなく、それをもとにして人間の営為が可能になる仕方である。あらゆる種に感性的な秩序あるまゝとして、経験として、与えられていなければならない。このような意識の受動性における経験の自己組織化・形態化において、根本的な役割を果たしているのは、時間性と空間性である。ある特定の物が、顕在的意識によつてそれとして同定可能でそれとして述定可能であるのは、その物が、単なる多様ではなく、時間順序と空間位置の中でそれなりに整然として、それ以外の物と隔てられ、それとしてまとまつて、現われるからこそである。経験が時間性と空間性ととも自己組織化するからこそ、顕在的意識は経験を概念化することができる。時間と空間の本性とは、事物がおのれの姿を現わしその独自の位置価値を得る仕方としての「継起」と「共存」なのである。

しかし、物はたんに時間空間に配置されているのではない。「見るとは、常に、どこかから見ることではないか。家そのものはどこからも見られていないと言ふことは、それが見ることでできないものだと言ふことではないか」(81)。我われにとつて時間と空間とは、この私によつて生じられる時間と空間である。この私の身体つまり固有身体 *corps propre* ⁽⁷⁾ からの方向や位置関係によつて、物の見えが生じ、この身体の運動によつて、物の裏や表といった面や奥行が生じる。身体性とは、世界の感覺性であり、おのれを基点とすることで時空に位置や方向や奥行をもたらし、それによつて「過去—現在—未来」と「ここ—そこ」という展望を経験に与える根源的機能である。

身体の自己知としての絶対的「ここ」 身体性そのものであるこの根源的機能は、何よりもまず身体・それ自身に適用される。この身体的反省によつて身体性の構造が成立する。経験をそこから捉える基点としての「ここ」でありながら、それ自身をも「そこ」にある物として捉えるという固有身体の固有身体自身に反射された根源的機能こそが、

固有身体自身のある種の客体化と同一化を可能にし、物と身体のある種の分離を可能にし、物のある種の対象化と同一化を可能にする。世界は身体の媒介によりその厚みを持つことになる。この「ここ」を基点として感覚的世界の原構成・構造化がなされるのである。

しかも、これは世界経験における「ここ」としての固有身体^⑧の位置が常に直接的に与えられているということに他ならない。我われは眼を開けるや否や、ここから、見られる世界が見られているということについての直接の知を持つ。これは根源的信念であつて、私の身体が「ここ」にあるということの知は、それを意識にのせる以前に了解されており、これは顕在的意識による概念を媒介にした反省的知ではなく、「前述定的知」(89)・「前意識的知」(96)である。「私の身体に適用された「ここ」という言葉が意味するのは、他の様々な位置との関係や外的座標との関係で決定された位置ではなく、第一次的な座標の設置、対象への活動的身体の投錨」(111)なのである。

また、「ここ」としての固有身体は永続する。身体は、探索の極限にある物と違つて、ある仕方では探索を拒否する。我われの視野はほんやりとした縁に囲まれており、それは我われの注意を退ける仕方では視野を常に取り巻いている。これは客観的身体の組成ではなく、現象的^⑨身体^⑩の、眼の構造である。眼とは、見ないことによつて何かある物を見る仕組みなのである。見える世界を取り巻く地平、これは世界の縁である(106-107)。この縁を捉えようとする運動自体が縁を縁へと追いやつてしまふ。それゆえ、「ここ」としての固有身体は、身体が身体である限り、決して捉えることができない。にもかかわらず「ここ」として、おのれのありかを何の介在もなく示す。

身体の一性としての身体図式 しかも、「ここ」のありかを示す「身体の自己知」^⑧は、ここから物を見ている眼のありかを示すだけでなく、固有身体全体に拡張される。自分の耳を触われと命ぜられたとき、私は最短距離をとつて自分の手をそこへと持つてゆく。命令を聞けば耳が「ここ」としておのれをアピールし、その「手がかり」(126)に手はおのずと誘われて応答する。これは、自分の耳の場所を眼によつて確認しているから可能なのではなく、身体

全体についての展開図を想像し、それによって位置確認しているから可能なでもなく、主観的意識が客観的対象から受けた刺激に反応するから可能なでもなく、かえって手が耳に慣れ親しんでいるから、耳の「ここ」に直接に手が結びついているからなのである。手は私の身体の部位がどこにあるかを眼や想像力によって確認しなくともよく知っている。それどころかこのような耳と手の親和性もとになってはじめて、我われは身体全体とその位置関係を言語化したり想像化することが可能となる。眼や舌や脚といった随意運動可能な諸器官もまた同様の親和的関係を様々な身体部位と無数に取り結んでいる。むしろこうした親和性の可能と不可能こそが、各感覚器官の機能形成と支配領域設定に根源的に関与している。我われの身体は、客体的物でもありながら主体的身体でもあるという厚みを身につけており、このような直接の親和性によって相互に複雑に結びつきあつた諸器官の系として世界の構造化に参与している。

身体系は、注目や触診といった単純な行為だけでなく、全体の均衡を必要とするような身体器官の複雑な組み合わせをも、直接的に可能にしている。身体器官の配置を、反省的認識による以前に、把握可能にしているのは「身体図式 *schema corporel*」である。「私の身体全体は、私にとっては、空間の中に並置された諸器官の寄せ集めではない。私は、私の身体を分割できないひとつの所有の中で持ち、私の四肢のそれぞれの位置を、それらをすべて包み込んでいるひとつの身体図式Vによって、知る」(114)。逆立ちをするとか、後ろ向きに歩くとかといった稀な行動の実現においても、この身体図式が様々な身体器官を状況に応じて振り分けることで、目的の達成が即座に行われる。「身体図式は、存在している身体諸部分の単なる複写でもなければ、それらの包括的な意識でもなく、身体図式はそれらの諸部分を、有機体の計画に対するそれらの価値の比率に応じて、積極的に統合する」(116)のである。

物の身体性と内在性 さらに、身体図式による身体の統合は物にまで拡張される。生きられる状況にあつては、物と身体はそもそも分離できない仕方では知覚的・運動的に密接に絡み合つて結びついている。「正常者は、知覚を通じ

て対象の中に浸透し、対象の構造をおのれ自身に同化するものであり、彼の身体を通じて、対象が直接的に彼の運動を規制する。こうした主体と対象との対話、対象の中に散乱した意味の主体による捉え直し、対象による主体の意図の捉え直し、こうした表情を介した知覚こそが、主体に対しておのれ自身のことを物語るひとつの世界を主体の周りに用意し、主体固有の思想を世界に設置する」(115)。触れるということにおいて手と耳が親和的な関係を取り結んでいるように、我われの身体は我われを取り巻く物と親和的な関係を取り結んでおり、身体部位の位置が直接に知られるように、物の配置もまた直接に知られる。我われの身体は我われの身近な物と行為にかかわる様々な契約をあらかじめ取り交わしており、それによつて顕在的意識を経なくとも複雑な行為が直接に可能である。また、身体と物とが密接に関連しあつた生きられる空間を地平にして、様々な行動が可能になる。「私が机の前に立つたまままでいて、両手でそれに凭れ掛かっているという場合、私の手だけが強調されて、私の身体全体がまるで彗星の尾のように手の後ろへ引き摺られている。それは、私の肩や腰の位置を私が知らないからではなく、それらの位置が私の両手の位置の中に包まれてしか存在しないからであり、私の姿勢の全体が机の上についた両手のその支えの中にいけば読み取られるからである」(116)。つまり、部屋やそこにある机と私の身体、手や肩や脚があつて、それらが部屋の空間を構成しているのではなく、却つて、私が机に両手で凭れ掛かるといふ状況がまずあつて、この凭れ掛けた机と凭れ掛かる両手という状況を分析することで、空間とそこにおける諸部分の配置が意識のもとにもたらされるのである。つまり、行為とは物と身体とが不可分な仕方互いに互いを包み合つて交感し合うことなのである。

「ある運動が学ばれるのは、身体がその運動を了解したとき、つまり、身体がそれを自分の入世界へと合体したときである。そして自分の身体を動かすことは、その身体を通じて物を志向すること、いかなる表象も伴わずにその身体に働きかけてくる物の要請に対して身体を応答させることである」(117)。我われの生きる世界には、すでに多種多様な行為を可能にする身体と物との系が設立されている。それどころか、物との親和性を取り結んだ身体にとつ

ては、身体の自己知にもかかわらず、まさに物がどこにあるかということから、私がどこにいるかということが知られる。「私は自分のパイプがどこにあるかを絶対知によって知っており、それによってこそ、私の手がどこにあるか、私の身体がどこにあるかをも知っている」(116-117)。物から固有身体が学ばれ、固有身体から物が学ばれるという交差がここにはある。物はまさに身体の外部器官なのである。

物の物性と超越性 物と身体との系は世界全体にまで及ぶが、しかし、それは物が身体に十全に与えられているということではない。ある対象と眼が「見る—見られる」という関係をとり結んでいるとしても、その対象は手によって「触れる—触れられる」という関係は取り結んでいないかもしれない、耳によって聞くこともできないかもしれない。物は常に「対象の深み」を持つのであり、むしろ感覚による把握によっては汲みつくせないということこそが物の物性である。対象としての物は、それが身体に与えられ、身体と様々な関係を取り結ぶことができるからこそ対象なのだ。だが、「対象が対象であるのは、対象が遠ざかりうるものであり、したがって最後には私の視野から消失しうるものだからに他ならない。対象の不在の可能性ということなしにはうまくいかないからこそ、対象は現前する」(106)。対象としての物の不在の可能性ゆえに、身体による探索を無限に動機づける極限として物は機能する。物は身体から分離可能な身体の器官であり、決して完全には支配しえない身体の器官なのである。

型としての身体図式 身体系は高度で複雑な行為さえ可能にするがそれはいかにして可能なのだろうか。最も肝要なのは、身体と身体、身体と物とを取り結ぶ関係が一对一対応ではないということに他ならない。耳を手で触わるという行為において、耳に触れるのが左手だろうが右手だろうが、それが示す価値は同じである。同様に、オルガン奏者がオルガンを弾く場合、そのオルガンを使うのが初めてであつても、彼はちよつとした準備さえすれば、それを使いこなすだろう。実存がある目的を達成しようとする場合、それは身体全体がそこへと向けられるのであり、利用可能な物のすべてが動員される。実存が身体によって世界に住むということは、その目的に向けて、その直面する状況

の中から、適切に利用可能な部分の選択がなされるということである。¹⁰⁾「私がテーブルに向かつて座り、電話の方に手を伸ばそうとすると、対象への手の運動、胴体の立て直し、脚の筋肉の収縮は互いに包みあっている。すなわち、私がある成果を得ようとする、可能な組み合わせがあらかじめ等価なものとして与えられて、関係する身体部分の間で役割が分配される」(174)。身体と身体、身体と物とを統一する身体図式は、単なる一対一対応の反応の交換式ではなく、反応のタイプであつて、実存の目的に応じて身体と物を適切に配分する「等価物の系」(175)なのである。これによつて、状況に多少の相違があつたとしても、同じ型の状況として、より柔軟な仕方、物と身体は関係し合うことが可能となる。身体の交感系は、反応系と異なつて、新しい環境への適応や未規定の偶然的事態への対処が可能であり、この時には越境侵犯である無制限の拡大適用によつておのれを膨張させてゆくのである。こうした柔軟性は、身体系が複数の感覚器官からなり、それぞれの器官が独自の構造とそれぞれの世界へのかかわり方をもち、それぞれがそれぞれの不足を補完して協働して機能するからこそ、可能なのである。

実存の拡張 我われの身体の習慣とは、こうした固有身体自身や物との関係の膨大な蓄積であり、より柔軟でより環境に適応した型の集まりであり、実存とは、その誕生以来、習慣化によつてこの身体系を膨張させ、より世界に密着した円滑なるものへと身体系を変化させてゆく運動であると言えよう。「帽子や自動車、杖に慣れることは、それらの物の中に身を据えること、あるいは逆に言えば、それらの物を固有身体の高に与らせることである。習慣とは、新しい道具を自分に付け加えることで、我われの世界内存在を膨張させる力、あるいは実存を変える力の表現である」(180)¹¹⁾。物と親和性を結び、他の身体と共感し、道具をおのれの身体の延長物へと同化させてゆく。それによつて、世界への私の身体の根づきがより強固で安定した円滑なるものへと成長し、人間的行為の幅が高度に複雑化し、繊細化してゆく。同時に物もまた細分化し多用途化する。かくして実存が世界を覆う。

二 欠損し競合する身体

しかし身体は、未だおのれに取り入れていない状況に出会い、その中で状況との円滑的な均衡状態あるいは自己保存を求めて、習慣化や自己拡張をひたすら求めてゆく運動でしかないのか。そうであるならばいざ世界をおのれのうちに包摂し尽くすのだろうか。たしかに身体は、状況をおのれの目的に適うように変革してゆくが、それと同時に、常に襲い掛かる偶然事に曝され、未規定的な状況に投げ出されてもいる。それだけではなく、身体には障害や欠損や疾病というあり方もあって、自己破壊さえも可能である。それゆえ、本節では、まずシュナイダー症患者や幻影肢患者といった病的な実存を検討することで、病的身体の世界への向かい方を見てみよう。たしかに身体はわれわれが、世界に住むための根本構造なのだが、それはそもそも偶然的な構造体であり、容易に障害や欠損を招き、しかもそのことを基盤にしてわれわれの経験を成立させるのである。

身体図式の障害としてのシュナイダー症例 『知覚の現象学』第一部第三章「固有身体の空間性と運動性」は、正常な身体と病的な身体の記述を通じて、身体の空間性と運動性を主題に取り上げている。病的な身体の記述の目的は、症例の生理学的説明と主知主義的分析に対する批判にあり、ひいては身体が世界に住むあり方としての実存の態度・実存の統合の度合いを明るみに出すことにある。ここでの病的身体とは、シュナイダー症患者の身体である。患者は、失語症、失認症、失行症に分類でき、それぞれ言語・知覚・運動に障害を持つが、障害は部分的限定的に留まらず全面に及ぶと結論づけている。「注意深く観察すれば、どの失語症も認識と行動の障害を含み、どの失行症も言語と知覚の障害を含み、どの失認症も言語と行為の障害を含んでいるが、障害の中心は、ここでは言語の地帯に、あちらでは知覚の地帯に、他の場合には行動の地帯に残っている」(146)。これは、障害というものが、全体的現象であって、単に客観的に特定可能な身体部位の欠損のみで説明のつくものではなく、だからと言って感覚器官を統合する認識機

能の障害だけによって分析できるものでもないということにはかならない。病的な身体は、正常な身体と同様に、その全体でもって世界に向かい、それぞれの不足をそれなりに補完し合い、彼固有の目的へと向けて身体諸部分をそれなりに適切に統合してはいる。障害の原因自体は客観的に観察可能な大脳部位の欠損ではあるのだが、障害の本質・意味は身体図式のあり方にあり、身体を統合する実存の態度の違いにあり、実存の統合の水準が低下しているということにある。

シュナイダー（ないしシュナイダー症患者）は極めて特異な患者である。彼は生きられる世界を喪失しており、もはや何事にも興味がわかない（*indifferent*）。実験的に目隠しされたシュナイダーは、自分の腕や脚を動かせと命ぜられても動かすことができない。また、自分の身体の位置や頭の位置を指を用いて特定することもできない。人から自分の体を触われてもどこを触られたのか言うことができない。目隠しされたままでは指示された身体部位がどこにあるのかが分からない。しかし、シュナイダーの知能は決して他人と劣ってはいない。眼を開いていれば、上記の運動や記述は可能である。また、眼を閉じていても、生活に必要な運動、彼にとって習慣化された運動であれば、指示を受けるや否や素早く正確に成し遂げることができる。つまり、シュナイダーは、生活に結びついた具体的運動（把握運動）は可能だが、実際的狀況に向けられていない抽象的運動（指示運動）については、行動に障害を抱えているのである。

しかし、患者も目的へと向かい努力する。眼を閉じて抽象的運動を命じられた場合、彼はまず問題の箇所を突き止めるために身体全体を用いた具体的運動からはじめねばならない。体全体を動かして、その箇所を大雑把に検討づけ、関係肢体を動かすことでその箇所を精密化し、次第に関係部位を突き止めてゆく。腕を上げよという命令であれば、まず「上」を見つけるために、体全体を運動させ、腕の振り子運動を経て、頭の位置を確認し、やっと「上」を発見する。「上」という方位は彼にとつて決して自明のものではないのである。このような全身運動によつて自分の身体

を現に動かすことではじめて、命令と結びついた意味を見出すことができるのである。これはあたかも暗闇の中、手探りで壁を探すようなものであり、病人は自分の身体を生命のかよわぬ無定形な塊としてしか見ていないということである。彼にとつては物だけでなく自分の身体でさえも、もはや何も語りかけてはくれないのである。「彼ら（病者）にとつて、世界はもはやすっかり出来上がって凝固化した世界としてしか存在しないが、これに反して正常人においては、世界は企投によつて偏極され、あたかも博物館内の掲示が観客を導くように、行動を導く無数の記号が、まるで魔術によるかのごとく、世界の中に現われてくる」（130…丸括弧内は筆者）。こうした記号や手がかりを生じさせるために、それを期待して、患者はとりあえず体全体を闇雲に動かしてみろしかない。

シュナイダー症患者が指示のために具体的な能動運動を必要とするのは、彼に身体イメージの能力が欠けているからである。我われは、指示されれば、そこがそこであると自己主張するような潜在的な身体イメージつまり身体図式を持つており、それに導かれて指示が可能であるが、患者にはそれが欠けているために、その運動を呼び起こす能動運動が必要なのである。「正常人においては、身体刺激は頭勢的運動ではなく一種の∧潜勢的運動∨を目覚めさせ、質問された身体部分が無名状態から脱して、特定の緊張によつておのれを告知する」（126）。正常者にあつては、すでに身体イメージというものが出来上がつておりそれが言葉や身体刺激によつていつでも引き出されるように状況の中でスタンバイしている。様々な状況に応じて対応できるように潜勢的ないし仮想的に手がかりや記号がこの現実的空間に含まれている。「そこ（病人）に見られるのは、土台は崩壊したのに、その上部構造を維持しようとする、意識の努力なのである。その意識は、習慣になつていた彼らの作業を模倣するが、その作業の直観的現実を獲得することもできず、その作業から十全の意味を奪っているその特定の欠落を隠蔽することもできない」（160…丸括弧内は筆者）。

幻影肢 詳述しないが、同様の障害は幻影肢症例でも確認可能である。患者は失つた身体器官がなくなつたという

実感がもてず、それが依然として実在するかのように振る舞う。幻影肢は、身体器官の欠損や切断にもかかわらず、それによって可能になっていた世界への適合の仕方を相変わらず保持しようとする身体図式によって現われる。それは残存するイメージというよりは、変化した状況に適応したおのれを未だに持てずにいる実存の態度「欠損の拒否」の現勢化なのである。欠損の拒否とは、おのれの仕事、おのれの関心事、おのれの状況、おのれの慣れ親しんだ地平へと我われが投げ入れている自然的な運動に対立するようなものは認めまいとする、実存の暗黙の否認である(97)。つまり、幻影肢においては、身体ないし身体と結びついた状況が、実存とずれを来たしており、この病的実存はおのれの直面する世界を受け入れることができない。

アリストテレスの錯覚 身体と実存のずれは何も病人にのみ見出されるものではない。「アリストテレスの錯覚」(93)は健常者における身体図式の自然な障害の例と考えることができる。「アリストテレスの錯覚」とは、中指と人差し指を交差させて、中指の右側と人差し指の左側を用いて一つの物体を挟んだ場合、それが二つの物体として感じられるという錯覚である。こうした二つの触知覚をただ一つの対象に総合することができないのは、「中指の右側と人差し指の左側とが対象の共同探索に協力し合えない、指の交差が、無理矢理させられた運動として、指そのものの運動的可能性を踏み越えている」(ibid)ためである。「アリストテレスの錯覚」が示すのは、単に協働しない身体図式の例というに留まらず、身体図式というものが、そもそも、それが正常に環境に適応している場合であっても、実存にとって、様々な水準で不具合や欠損や競合や不能を抱えているということである。「自然の教え」は誤りを含む。たしかに身体は、おのれの部分を統合し協働させて、実存の根本的態度を実現する運動なのだが、それは協働しない部分同士や、統合できずに忘却される縁も含んでいる。「アリストテレスの錯覚」は、実存の統合の水準自体は高いにもかかわらず、実存の目的に向けて身体を協働させることができない構造上の障害あるいは制約の例、たとえば、う。

病の身体と障害の身体 シュナイダー症例や幻影肢といった病的実存の例は何を示すのだろうか。それは実存が世界を失うこともあるということであり、実存の超越の運動が世界参加ということを不完全な仕方ではかなし得ない場合もあるということである。その理由は、実存と身体の間はずれがあるから、現象的身体が決して完全には世界への超越の運動たりえないからなのである。たしかに病者も独特な仕方では実存であり、世界を獲得してゆく拡大運動の**①**だが、しかしそのあり方はもはや弛緩している。身体**②**の病いに呼応して、世界への実存の関心は薄れ、至るところで躓きを抱え、解決の処方箋も見つからない。身体図式は等価物の系であり、即座に他の身体や物と対化することであるが、身体**③**の病や障害においては、非等価な交換や交換の不能や対化におけるずれといったことが、生じているのである。しかし、これは「自然の光」によって、正されるべき身体ではない。

正常人であっても、身体図式は決して万能ではない。「アリストレスの錯覚」の例が示すまでもなく、我われの身体は構造上の様々な制約を持っている。器官同士が協働できずに競合や反目が生じる組み合わせもある。身体図式の状態への適応は幅があり、複雑であり、多様である。それこそが未規定的な状況に対応することに役立つ。しかし、身体図式の対応能力に幅があるのは、身体器官が複数からなり、それぞれが独自の世界をもち、身体器官同士で複雑に結びつきあっているからに他ならない。器官が複数であるために、様々な物と「できる」という糸を結ぶことができ、それによって幅のある臨機応変な対応が可能なのである。しかし、それゆえに、こうした身体と身体とを、身体と物を繋ぐ通路は時に相互に衝突し合う。その場合、身体は抵抗性や有限性の器官となってしまう。我われの身体系は、膨大な蓄積であるが、繊細な織物でもあって、ちよつとしたゆがみや変更が生ずる体系全体の成立さえも脅かすのである。実存の目的の実現も阻害されてしまう。これが病である。しかし、こうした身体**④**の構造的制約は生の連関そのものの根源的デザインとなる。

おわりに

身体が世界に住むこと、それは身体系が網の目のように「できる」という根を張り巡らせることだが、身体による世界の獲得には円滑だけがあるのではない。現実には、身体のを織り成すもうひとつの糸は「できない」でもあって、構造上の様々な制約があり、障害があり、断線がある。この二つの糸によって身体系という編み物が織り成される。実存による身体の統合にも様々な水準があり、身体が病に罹ることによって実存は容易に統合水準を低下させてしまう (Seligson)。たしかに、正常者にあつて身体は実存の運動の現実化の機能であり、実存は身体を統合する。病的身体であつても、実存の統合の水準が低いで、実存を現実化させる働きであることに変わりはない。しかし、身体は十全に実存の現実化なのではない。たとえ実存のための逃走領域が常に残されているとしても、実存の超越の運動、実存の諸態度、偶然的状況をおのれのものとして身体的に獲得してゆく運動は、状況と身体の制約を受けており、統合化は決して円滑ではない。しかもそれは、新たな状況に襲われる為に統合化による平衡状態が得られないというだけではない。仮にもはやなんら変化しないような状況があつたとしても、超越の運動は世界との平衡状態を得ることができないだろう。というも、身体が、事実上の構造にその限界をかかえており、協働ということが自由な幅を持ち、そもそも複数の器官や複数の態度を通じて世界を獲得するからである。身体はそれぞれの器官同士で協調しあつてばかりいるのではない。それゆえ、身体とは、実存の統合を拒む事実上の構造的制約をも併せ持つ器官であり、それ自身で見れば、統合の機能でありながら同時に統合を妨げる機能としても働くのである。ここに、これはすでに歴史的に設立されてしまった意識や実存といった概念を引き受けざるをえない我われにとつて困難事ではあるのだが、実存から解放された自然の身体が、生でもあれば死でもあり、快でもあれば不快でもあるような身体が、垣間見えるのではないか。訓育された身体以前の野性の身体があるならば、それは必ずしも実存のために世界を獲得して

ゆく乗り物ではないのである。

〔付記〕

以下の著作からの引用は頁数を本文に組み入れた。

Merleau-Ponty, Phénoménologie de la perception, Gallimard, 1945.

〔註〕

(1) 本稿は、拙稿「奉仕と抵抗―メルロ＝ポンティの存在論における身体の諸相―」（西日本哲学会編『西日本哲学年報』、第十四号、二〇〇六年一〇月、一七―三四頁。）におけるメルロ＝ポンティの存在論的身体についての筆者の考察を、遡って、『知覚の現象学』におけるメルロ＝ポンティの現象学に読み込む試みである。

(2) 本稿では、他者について、直接は、扱わない。しかしながら、ここでの物とは自然科学の対象としての物体ではなく、固有身体の対象としての物であり、対象と言うよりも身体との交感項であるような物である。それゆえ、他者の身体も根源的にはここでの「物」に他ならない。これは道具についても同様である。

(3) 「身体は凝固化あるいは一般化された実存であり、実存は永続的な受肉である。」(194)。

(4) 事実的偶然の状況に意味を与える運動、「実存が事実的状況を自分の責任でやり直し、変革するこうした運動を、我われは超越と名づけるのである。」(197)。

(5) 事実上の構造面で言えば、身体とは人間における感性的なるものの総称である。例えば、感覚器官としては、視覚や触覚などの五官、内臓感覚や筋感覚、運動感覚や位置感覚や不快などの情感などから構成される。機能としては、見る、聞く、動く、食べるといった基本的な機能から、特定の道具を用いたり、特定の状況に限定的に対応するといった複雑高次な機能まで多種多様である。身体には、一方で、我われ自身が身体器官を動かす能動的側面があれば、他方で、その属する環境から何がしかの影響を蒙って身体器官独自の反応が生じる受動的側面もある。われわれ人間のみならず生命体は身体を通じて環境に住むのであり、身体を通じてこそ事物や他者や道具にかかわり、おのれの目的を実現することができる。いずれにせよ、身体は環境にそれ全体がかかわ

ており、にもかかわらず身体器官それぞれは独自の構造を持っている。

- (6) 実存とは、まなざしや、共感覚や、性や、運動の主体や、行動の地平としての自由と逃走や、言葉の主体である沈黙のコギトや、「ここ」や、移行の総合としての主観時間などを、様々に統合する「私」の次元である。しかし、これは統覚ではない。様々な次元の次元であり、推定的で暫定的な次元、身体へと凝固化することでのみ存在するような「見えないもの」であり、世界の「くぼみ」である。それが身体や現象を統一するのではなく、却って身体や現象のおのずからなる統一化のうちに垣間見られる次元である。
- (7) 固有身体とは、標本・見本のような、同一的普遍的な身体ではない。この私の、他人と似通ってはいるが、それぞれに少しづつ違う、各自の身体である。生をうけ、両親の特徴を宿し、外科的に施術され、欠損し、機械的に補完された、私の身体である。しかし、身体は他の身体と協働する。そこに身体的同一性がある。たしかに、身体は物の同一性の基盤をなすのだが、それは推定的な基盤である。それゆえ、固有身体によって、経験を構造化するのだから、物の同一性は、固有身体によってそれぞれ異なる。眼の位置が少しずれただけでも同一性は厳密には異なるだろう。固有身体の相違とは交感の仕方の相違であり、世界の形態化の相違である。

- (8) 身体の自己知とは、痛みを歯に感じることではなく、むしろ痛みを感じているのがそこであるという場所確定ができるための条件、歯の痛みに気づく前に舌がその箇所を触わっているということ、舌がその箇所へと誘われて運ばれていて、それによってそこが問題の箇所であるということが議論の余地なく分かっているということ、これである。

- (9) 例えば、『行動の構造』第二章第三節「象徴的形態」参照 (Merleau-Ponty, *La structure du comportement*, Presses Universitaires de France, 1942, pp.130-138.)

- (10) 日本人とフランス人では同じ感情表現でも身体部分の利用は違う。したがって、仕草による感情表現において重要なのは、身体器官の同一性ではなく、状況に対処する生き方、固有身体の使い方、世界の形態化である(920)。

- (11) 聴衆を得るとは、特定の言葉の組み合わせの利用によって、あるいは身体的身振りや声音などを用いて、ある独特の雰囲気を作り出し、それに陶然とするという仕方聴衆の身体図式を作り変えることにある。このようにしてそこにある種の愛や権力関係が生まれる。我われが文化的人間であるというのは、このような身体の技法を様々なレベルで身に着けることであり、ある特定の組み合わせに対してある特定の交感を持つことなのである。当初は自己保存のための反応系であったかもしれない、素朴な動物的身体が、文化的な交感系を身に着けることで、自己保存すらも裏切るような行為が可能となる。

- (12) 意識の生には「志向弓」が張り巡らされていて、これが我われのまわりに我われの過去や未来や、人間的環境や、物的状況や、観念的状况、精神的状況を投射し、あるいはむしろ、我われをこれらすべての関係の下に状況付けている。この志向弓こそが、感

(13) 官の統一を、感性と知性の統一を、また感受性と運動性との統一を作るのであり、これこそが疾病の場合に「弛緩」するのである。我われの経験について仔細な直接的記述を遂行するならば、その根源的であり方は統合的であるよりはむしろ分裂的ではないだろうか。身体は実存がそれを統合的に利用するのだが、その原初性においては分裂的なのではないか。自己と世界という、経験に対して統制的に働く、経験を統合へと向けて調整させる二つの根源的信念よりも、経験それ自体の持つ分裂する力こそが最も根源的な信念なのではないだろうか。というのも、自己や世界はむしろ「沈黙」や「空虚」や「不透明さ」なのだから。